『比較民俗研究』22. 2008／3

エーバーハルト『中国昔話のタイプ』とその協力者

飯倉照平※

盧溝橋事件で日中戦争が全面化した1937年、まだ28歳のドイツ人中国学者ヴォルフラム・エーバーハルトは、『中国昔話のタイプ』という本をドイツ語で出している（Wolfram Eberhard, "Typen chinesischer Volksmärchen"）。のちにアメリカに移住して多方面の研究書を出すことになる著者の、まだ年若い時期の仕事であった。日中戦争以前の中国での資料を集約した昔話のタイプ・インデックスとして、日本では関敬吾の『日本昔話大成』や、のちに出た稲田浩二の『日本昔話通観』などでも、比較のための基本書として長く使われてきた。

ところで、このエーバーハルトの本では、巻頭に「彼の資料無くして本書は成らなかった」として「Ts'ao Sung - yeh (Chin - hua)」への謝辞がある。この協力者が浙江省金華出身の曹松葉という人物で、1930年前後の『民俗週刊』などに「省立金華七中」という肩書で郷里の民俗についての文章を書いていることは分かっていたが、その経歴やエーバーハルトへの協力の実体はほとんど知られていなかった。

民国期の昔話研究に関心をもつ馬場英子、瀬田充子、千野明日香の三人は、2001年から2002年にかけて、上海文聯（現在は復旦大学副教授）の鄭土有の援助をえて、金華市曹宅鎮での昔話の聞き取りと曹松葉の調査をおこなった。曹松葉のことは、金華市民間文芸家協会の黄子奇による関係者からの聞き取りがなされ、かなり分かるようになった（馬場他編『金華曹宅鎮昔話集（稿本）』全２冊、参照）。

曹松葉は1897年生まれ、南京の高等師範を卒業してアモイの集美学校で国文の教師を1925～1927年までしていたが、「左傾」を疑われて契約を更新できなかったという。この時期、魯迅の作品に影響を受けて創作を試みている。1927年に郷里へ帰り、省立七中の教員となった。雑誌に掲載された十数編の文章は、これ以後の数年間に集中している。のちにエーバーハルトに提供された昔話は、この時期に学生たちの協力をえてまとめたものらしい。

1934年、ベルリン民族学博物館から中国に派遣されたエーバーハルトは、同年９月に金華を訪れて曹松葉に会っている。その時、曹松葉は自分の採録した昔話約500話、民謡約400首は、出版のため送った上海で焼失したと話した（これは1932年の「上海事変」で日本軍が商務印書館を爆破したことを指したのかもしれない）。ところがエーバーハルトが曹松葉の協力を得て現地調査をおこなったあと、北京に滞在中の同年冬に、その手稿が無事であったことが判明し、さっそく７冊に収める475話が曹松葉から送られてきた。

３年後に刊行された『中国昔話のタイプ』の例話には、この手稿に収める昔話が多数挙げら

※東京都立大学名誉教授・中国民話の会世話人

れていた。さらにエーバーハルトは、手稿に収める昔話のすべてをドイツ語に翻訳し、以後、戦後にいたるまでのさまざまな刊行物に掲載して、曹松葉の記録を高く評価していた。しかし、エーバーハルトがナチを嫌ってドイツを去ったあと、ベルリン民族博物館に保存されていた手稿は、のちに（こんどはほんとうに）戦火で焼失して失われた。

一方、日本軍に占領された金華では、曹松葉の長兄が傀儡の郷長となっていた。そこにいた曹松葉は共和国成立後の1971年まで教職についており、晩年は「はだしの医者」に従事し、1978年に亡くなった。エーバーハルトとは、その後、文書による往来があったかどうかさえも判然としない。知識人としての行状は地元では知られていたものの、エーバーハルトへの協力が本人から語られた形跡は無く、中国の民間文学研究史でも取り上げられることはなかった。

2007年４～５月に刊行された馬場・瀬田・千野編訳『中国昔話集』全２冊（平凡社・東洋文庫）は、エーバーハルトの『中国昔話のタイプ』にしたがって、215タイプの例話を全訳したものである。そのなかには瀬田がドイツ語訳から復元した曹松葉の記録も20数話ふくまれている。

中国の昔話のタイプ・インデックスとしては、その後、アメリカ在住の中国人学者丁乃通が、欧米で作られたAT（アールネ・トンプソン）分類による索引を1978年に刊行している。これは文化大革命以前の資料をほぼ網羅して作成されている。

しかし、『中国昔話集』の編訳者たちは、むしろエーバーハルトの『中国昔話のタイプ』の独自の構成が、漢民族の昔話の特徴をより正確に伝えていると考えた。同書の解説によると、そのことは2001～2002年に編訳者たちが金華で採録した昔話や、近年の中国で刊行された「民間故事集成」との比較でも、検証することができるという。

以上長々と記したのは、もちろん『中国昔話集』という労作の刊行を紹介したかったためであるが、同時に、外国人の研究者とフィールドでの協力者の関係についての一つの事例を知ってほしいという気持ちがあったためである。

最近、わたしが手にした萩中美枝『アイヌ文化への招待』（三弥井書店、2007年）には、著者の配偶者であった知里真志保からあずかった「一高時代のノート」のなかに、アイヌであるために受ける迫害・侮蔑から逃れることのできない苦しみが書きつらねてあったことが紹介されている。さらに、その知里が死の直前に、「二階にあるフィールド・ノートはかくして置けよ。あれがあるってわかれば、あいつら寄ってたかって持っていってしまうからな」と言い残して、一部の日本人研究者に対して強い警戒心を示していたことが語られている。

時代も状況もちがうし、曹松葉と12歳年下の外国人であるエーバーハルトとのあいだには、この知里の場合とはちがう確かな信頼関係があったように思われる。その曹松葉の肉声が、時代の波にかき消されて、後世に伝わらなかったのは残念であるが。